
とある科学の警備ロボ改

軽い雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の警備ロボ改

【Nコード】

N1037Z

【作者名】

軽い雪

【あらすじ】

憑依したのはドラム缶と言われる警備ロボ。

ことあるごとに犠牲となる彼らなのだが、悪の天才科学者（嘘）によって開発された一体に主人公は憑依してしまう。だが、搭載された能力はすげえ物で。

なんだかんだで暗躍する警備ロボのお話。

機体詳細（前書き）

誰得

機体詳細

Name【警備ロボット改or村雨】

body 身長、体重等は普通の警備ロボと同じ

どういう訳か、かつこいいロボに生まれ変わりたかったのに警備ロボに憑依してしまった

今作主人公。機体カラーは通常の物とは違う、いかにもな特別仕様。

?通常の三倍?がコンセプトで、本来の予定カラーは赤だったらしい。

頑丈さ、タイヤによる走行スピードが三倍、という事らしい。

血液型は元、O型。性格は陽気で適当。

一度心に炎が灯ると中々消えない。鎮火して。

能力：スマブラXの敵キャラを構成する物質

なんか紫色のマリモのような物で形を形成、武器等を創り出す事が出来る。

武器使用モードでは、腹の部分が上下に展開して若干カッコ良くなる。多分。

反動もどつやら打ち消してくれるようなので便利。

機体詳細（後書き）

村「俺の物質に常識は通用しねえ。物質名？忘れたんだよ、言わせんな恥ずかしい」

雪「確か影蟲みたいな名前じゃなかったか？」

まさかのドラム缶

「…できたぞ…ついに…奴らを見返せる…！」

ここは学園都市内のある研究所。

その研究所は、主に兵器開発を目的とされた第二学区にあった。

「後は起動テストのみだな…今夜は寝るとしよう。ふふ、明日が楽しみだ…。」

白髪が少し混じった、何処にでもいるよう白衣を着た中年男性は兵器開発のメンバーの一人。

目に隈が出来ているところを見ると、徹夜だったらしい。体大事にしろよ。

その男はある兵器を秘密裏に開発していた。…否、改造と言えるか。

その改造対象は、部屋の中心部　整備用機械など、機器が密集している場所に、
見えないように隠してあった。

その形状はドラム缶のような筒状の形で。

カラーはグレー、レンズの色は蒼。

学園都市に蔓延る警備ロボットだった。

通常とはカラーが違うという点を除けば、ただの警備ロボットだが…。

ブオン、とレンズに光が灯り。

「警備ロボット改」が起動した。実に安直な名前である。

先ほどの研究者の意図せずに、である。

足と思われる部分に付いたローラーでスムーズに動き出したそれは、

その夜、その施設から逃走した。

我輩は警備ロボットである。仕事はしてない。
気が付いた時は知らない天井どころか、知らない部屋であったのだ
が…。

すいんすいんすいん。

「な、なんだって…。確かにロボにしてくれとはお願いしたが…こ
れは酷い。」

鏡を見てみてもそこに写るのはドラム缶のようなロボ。

つまりは俺、カッチョイイロボなんてことはなく、警備ロボに
転生してしまったわけである。

…ん、でもどつちかといえは憑依なのか？
製作者いるみてえだし。

まあこの際どちらでもいいのだが、と俺は展示ガラスに映る自分の
姿を見ながら、呟いた。

因みに喋れる。理由はしらねえ。でも損はしないし大歓迎。
警備ロボでなければ手放して喜べただろうが。…清掃よりましか。

我輩は警備ロボット。名前は村雨と言う。

前世でトラックに轢かれ死亡したのだが、どうやらそれが神様のミ

スだったらしく、

「お詫びに能力付けて本の世界に飛ばしてあげるよ」という提案に従い、今に至るといっわけである。

因みに、人間では無く「おら、心を持ったかっつけえロボになりてえ！」とお願いしたのだが。

先程も述べたようにお願いした結果がこれなのだ。無様ね。

この世界が「禁書目録」の世界であった事は良いとして。

せめて、ガトリングレールガンやら、パワードスーツやらになりたかったのだが、いまさらその贅沢も言えない。

「まあ、こうして喋れるだけましって所か。」

設計コンセプトは「通常の三倍」らしい。何処の赤い彗星だ。

「速さ」「頑丈さ」においてだそうで、確かにほかの警備ロボよりスイスイ進めるのだろう。

原作でも全然速い方だったと記憶するが、彼らは余り登場していない。

所詮、やられキャラである。

電撃の槍を浴び、イコールスピード絶対等速に壊され…。

レベルアップでも確か警備員の盾にされていたはずだ。

カラーリングは赤のほうが良いと思ったが、生憎、赤色の部分は一つも無い。

然し、それは例の研究者が開発した部分。

俺には…正確には俺の？中身？が圧倒的に違う。

俺の中身、亜空間なのだ。

この能力が出た原作はスマッシュブラザーズX。

あれだ、兎に角中身が四次元ポケットで、いろいろモンスターが出る奴。

腹ん中に紫色のマリモみてえなのがうじゃうじゃしてやがる。きめえ。

それが集まり、形を成す。というわけだ。

…お、ということとは兵器が作りだせんじゃね？

ガトリングレールガンそのものになる事は諦めるしかないが、ひよつとすれば作り出せるかもしれない。

…というか武器を取り出す事は出来た。

アニメの超電磁砲で一度だけだった気がするが、警備ロボが変形した所がある。

まあ、そんな感じで、収納された腹みたいな部分が展開する。その腹から、作り出した武器を発射する、というわけらしい。役に立つ能力がこれかよ、物騒だな。

しかもカラー的に目立つし。

「ねえ、見てあの警備ロボット、色が違うわ！」

「うわ本当！新型かしら？」

いつの間にか好奇心旺盛な若者達に囲まれていた。仕方無しによく滑るように動くタイヤを動かし、その場を退場するのであった。

途中で我らが同胞の清掃ロボに乗ったメイドさんへ乗り換えられそうになったが、

ここは自慢のスピードに逃げ出した。

目がランランと輝いていて、ロボなのに寒気がした。

「なんだ警備ロボかー。」

なんかがつがりしてらっしゃったけど。

彼奴は只者では無いと感じた、というか例の多重スパイの妹様ではないか。

清掃ロボの動きを掌握しきっている彼女

土御門舞夏。

出来れば暫く会いたく無いな、乗られたらどうなるかわからねえ。

相変わらず絶好調な滑りのタイヤ。すっいんすっいん。

現在、俺は目立つ商店街や店の集まる通りから離れ、例の公園まで来ていた。

我らのヒーロー、上条さんの札を見事に飲み込んだあの自動販売機がある場所だ。

夏休みと言えど、人の出入りは疎らでこの公園の広さも相まってか人気をあまり感じない。

ガタン、と公園の入口の段差を強引に乗り上げて中に入る。

「ふむ…、暇を持て余す。」

避難した所でやる事のない俺だった。

鬼じつじつなドラマ缶(前書き)

発想の勝利……なの……か？

鬼じつじなドラム缶

「ちえいさー！」

世界には様々な掛け声が存在する。

格闘家とかの「ほわちゃー！」は勿論、「ヒヤッハー！」なんて声もあるのだ。

…ん？後者は掛け声に入るのか？

まあ、掛け声は兎も角として。

「まじかよ…、次の原作メンバーエンカウトが…」

冒頭の掛け声でお気づきの方も居るだろうが、取り合えず説明しておく。

掛け声を上げているその人物 御坂美琴。学園都市の超能力者で、

【とある科学の超電磁砲】の主人公。

学園都市に確か…七人だけか、？しかないlevel5の一人。

まあ、例の公園に入ったはいいものの、やる事のない俺はこれから
どうするべ？てきな事を考えながら

これからどう生きていくかについて模索していた。

警備ロボである俺に出来る事なんて高が知れているが。

んで、何気なく公園内を走り回っていたら。

冒頭のように超有名な電撃姫の姿を確認してしまったというわけ
ある。

うっ、次に会うのは上条さんの予定だったのに…、と思いつつ。

バゴオッソーン!!

最早、手馴れているとしか言いようのない蹴りを見る。

無論、風圧だとかでスカートが捲れた訳なのだが覗くのは色気の無い短パンであった。別に悲しくはない。

「あちゃ〜…いちごおでん…こんな暑い日にホットなんて飲めないわよ…」

学園都市製ゲテモノドリンク。

それは何を理由に、何の目的で、どうしてそれが商品化したのか全く解らない飲み物。

？いちごおでん？に限らず、？ザクロコーラ？？ヤシの実サイダー？なんてものがある…

「…もっかい蹴るしかないわね…後で黒子にでも渡せば飲んでくれるかも」

…ヤシの実サイダー来いッ!

目の前の少女が欲しがっている所、どうやらヤシの実サイダーは普通らしい。飲んでみたいわ。

ロボだから無理、という事態に改めて、…、…となる俺だった。

再び蹴られる自動販売機。

本来なら、『止めて!もう自動販売機のHPは0よ!』とでも言うて止めるべきなのだが。

あの自動販売機、一種の「アクセラレータ一方通行」なのだ。

無論、あの自動販売機が何かを反射するという訳ではない。別にカラーが白と赤な訳でもない。

あの自動販売機、札を飲むのだ。

つまりは、札を入れれば最後、野口であろうかが諭吉であろうかが帰らぬ人になる訳である。飲み込まれた日には、涙を流しながら合掌するしかない。両替ボタ
ンも無効や。

何だかんだで御坂美琴もその被害者の一人である。

被害の規模は諭吉一人。

…自動販売機に万札とは、かなりブルジョワな事がわかる。

んで、その万札の分を取り返すべく。

バゴオッソ!!!

喉が乾いて、偶然立ち寄った時はこうして毎回蹴っている訳である。
…止め具が緩んでいて、蹴ったらすぐ落ちると言っていたが、札を飲む事と言い、修理しないでもいいのか？

と、まあ自動販売機はこれぐらいにして。
目の前の彼女は二度目の戦利品…ヤシの実サイダーを手に入れる事が出来たようでご満悦の様子だ。

「んぐっ!!!」

ブルタブを開け、グビツと人飲みした彼女は公園から出ようとしてこちら（出口）を向いて…

盛大に吹き出し掛けた。

「けほっけほっ……まずっ、見られてた？」

ギリギリセーフで抑えたが、ドツキリしたのだろう、若干涙目になっていた。

はい、バッチシ見てます。ええ、見てますとも。

だからその電撃を帯びた右手で俺に触れようとししないでください！

「見たこと無いカラーね。新型……まあ兎に角」

け、消される！（記憶的な意味で）

彼女の能力『電撃使い（エレクトロマスター）』は文字通り、電撃を用いた攻撃が主流である。

『超電磁砲』はそんな彼女の必殺技から取られているのだが…、無論他の用い方も可能だ。

特殊な電波や電撃を流すことで、機械類のハック等も可能。

そして彼女はその『電撃使い』のトップ、level5である。警備ロボの一体や二体、ジャックするのは朝飯前なのである。

捕まる=Electronic Haq！（ハックされる）

「あつ、コラ！待ちなさい！」

「戦術的撤退ニダ！戦術的撤退ニダ！」

逃走は必然的である。誤解を解くにも色々メンドクせえ。

タイヤを一回転させて、方向転換、何故か追加されているジャンプ能力を使いその場を逃げ出す。

最高時速は150km。

…どう考えても三倍じゃないです、有難う御座いました。

と、流石に街中で爆走などできない。それで事故ったりなどしたら目も当てられないからな。

「…ターゲットからの逃走に成「逃がさないわよッ！」…!!」

キラリッと、レンズが光に反射してセリフが決まろうとしたその時。

振り切った筈である彼女の声が聞こえた、っとうおっ！
彼女の右腕が寸での所で俺の体をタッチしようした。…触れられればアウト…

逃げなくちゃ駄目だ、逃げなくちゃ駄目だ…！

彼女が俺に簡単に追いつけた理由は解る。

恐らく、電磁加速が何かだったはずだ、今一覚えていないが。

効果は勿論、スピードを歩行スピードを上げる事ができるという物。

正直、初のバトル(?)がlevel5なんて、相手が悪すぎる。
…というか、結構しようもない俺。

然し、このままでは振り切る事が出来ない。

「()うおおおお！考える俺！諦めたらそこで試合終了だっえーい
「()」

「す、すばしっこいわねえ…！本当になんなのよアレ…！」

現在走行場所はアスファルトの上、このままでは商店街を通過しなければならぬ。
それは、相手にも、俺にも不利だ。決めるなら今しかない。

特殊兵器射出モードに移行……完了まで残り10秒

「な、何よ…?!」

ういーん、という音と共に体の中央が上下に割れる。
間もなく、その射出口が見えた所で…10秒が経過した。やった！
これで勝つる！

特殊兵器？けむり玉？を射出可能。

「きゃっ！？煙幕ってケホッケホッ！」

パシユツと言う気の抜ける音と共に、白い洗剤剤のような玉が射出された。

…これも影蟲製である。そして空気の漏れる音が聞こえ始め、白い煙幕が放出された。

タフデ○ト……某菌茎洗剤剤の宣伝が何故か脳内を過ぎるが、（洗剤剤関連）それはどうでもいい。

俺はその場から見事に抜け出す事が出来たのであった。

鬼じっじなドラム缶（後書き）

最後投げやりです（＾　＾、　）

村「ヤムチャしゃがって…」

ぶっちやけ、影蟲は無限に沸くのでチートです。有難じっじなままじ
た。

食品は無理だけでも

HEROとダンボールとドラム缶(前書き)

テンポ悪いぜえーヒヤッハー！

準備運動も予て、ノロノロ書きます、さーせん。
因みに、まだ夏休みは始まっとりません。

HEROとタンボールとドラム缶

見事に特殊兵器によってLevel5を出し抜いた俺は、現在再び暇となつてしまったのでぶらぶらしていた。

友人や知人が居れば、是非ともそこを訪れたい物なのだが、ご生憎、現在ボツチである。

「ああ…暇だ。」

相変わらずの機械音声とは思えない声が俺から発せられる。

とはいっても警戒を怠つてはいけないのが実情。

逃れる事に成功したといつても相手は、電磁波レーダーを持っている。

それに加え、視野的なカモフラージュも色々とダメなのだ。

だが…、そこで俺はある物を思い出した。これなら行けるんじゃない、俺って天才。

ガタガタガタガタガタ！

「
」

被っている本人はご満悦のようだが…現在村雨が入っている物は潜

入任務においての必需品、

『ダンボール箱』である。

某蛇なら「いいセンスだ！」とサムズアップしてくれるだろうが…
因みに被る事は出来ても、引きずったままなので音が激しい。

「あ、あのダンボール、動いてない？」

「動物が何か入ってるんでしょ」

…大丈夫なのか大丈夫じゃないのか実に怪しい所である。

「ふ、不幸だッー！」

「…この叫び声は！」

ダンボールの持ち手の隙間から、声がした方へタイヤを走らせる。

再びガタガタ音が鳴り響き、通行人が驚きの声を上げているのが聞こえたが、今はそんな事はどうでもいい。俺は彼に会わなければならなイツ！

そして遂に、曲がり角からツンツン頭の少年が猛ダッシュで走って来た。

あ、やべ、このまんまだと…。

「ぶつかるぞ！少年！！」

「えっ　　うおおっ！！」

言わんこつちや無い。

え、俺はなんでよけなかったのかって？…俺も人のこと言えないな。

「はあはあ…へっへっ…やっと捕まえたぜ逃げ足大王！」

「ヒイハアー！観念しなあ！今なら金だしや許してやるぜえ！？」

「それを寄越せ！全部、全部だ！」

「（こいつら楽しいな）」

おっと、是非ともコイツら（不良）と漫才したい所だが…。

上条さんはここで守らせていただく！

「少年！今のうちに逃げろ、ここは俺に任せるんだ！」

「いてて…っあ、ああって…」

こちらも負けずと死亡フラグを建て、応戦。

というか…ここで絶対俺を置いて行かないぞ、上条さん。

「だ、ダンボール？」

「ダンボールとて喋る。喋るダンボールである。」

「へえーそうなのかって…てえっ！んな訳ねーだろ！」

おほ、良い突っこみ。

「なんだあ？ダンボール風情が、俺達に楯突こうってんのか？」

「やあ〜ってやるぜ！」

敵対象確認。選択武器はM61 ウエポン バルカン…銃弾はゴム弾を選択、
展開を開始します

「『『『な、なんだあ?!』『』『』」

上条さん、そして不良三トリオが揃ってリアクションをくれた。

『説明しよう! M61バルカンとは、アメリカで1956年に開発が完了した20mmのガトリング砲である!』

「1956年って…また古いのを何で…。というかどこにそんな物が搭載されたんだ!？」

まあ、確かに今は軽く何十年も経ってるし、それにこの学園都市だ。これを超えた高性能な武器なんていくらでもある。だが、古いからといって馬鹿にしては駄目だ。

上条さんが頭を抱えて唸っている。…というか逃げるよ、何してるんだ!

うーん、という気の抜けた効果音と共に、砲身が出て。

展開完了。

「さあ、ためエー! 試し撃ちの時間だぜえー!」

「な、ダニい!？」

「アッー!」

「お、覚えてるよー!」

「ふっ、つまらん物を撃ってしまった」

「何か…上条さん、何か空気がぽいな…何か良くわからないけど、不幸だ…」

こっして、

幻想殺しとドラム缶が交差する時、物語は始まる。

HEROとダンボールとドラム缶（後書き）

（空き地）

雪「三下優しいなア」

村「不良がこういう奴ばっかりだったら楽しいと思うんだ」

雪「因みに、今回のM61バルカンですが、一分間に4000発辺
発射します。」

村「ゴム弾でもオーバーキル乙。付け加えると反動は約一tらしい。

」

HEROとCMとドラマ缶(前書き)

気づけば一ヶ月近く更新してませんでした、さーせん

HEROとCMとドラマ缶

「いや、色々突っ込みたい所満載だけど、助けてくれてありがとうな。」

「ふっ、気にするな、青年よ。」

無事に野生の不良三体に勝利を収める事が出来た俺は、今現在近くの公園に居た。

わあ、やったね、尊敬する人からお褒めの言葉を預かったよ！

それは兎も角。

「…死んだな、俺」

「どうしたんだ？」

いま、搭載された電磁波レーダーに、ある人物が引っ掛かった。どうやらLevel5はそうとう俺の記憶をお亡くなりにしたいらしい。

十二時の方角からカテゴリーズ：『ビリビリ』が高速接近です。

危険度：『＼（＾０＾）／』

「げっ…もしかしてビリビリって…」「ああ、想像通りでござえます」

くっ…まさか最高ランクの危険度を指し示してくるだど！？

こうなつては、抜群のスピードをもってしてもダメだ！煙玉も多分学習されているだろう。

上条が顔を引き攣らせ、12時の方角を見やる。

C a u t i o n s ! C a u t i o n s !

ついに奴が現れた。

「見つけたわよ…ああ、アンタも居たのね。いいわ、まとめてヒクヒクさせてやるわ…！」

バチバチィツと紫電を纏い始める御坂様（悪魔）

「なだはああは!?!?何で上条さんまでもが!?!?」

「「では皆様、準備は整いましたでしょうか!?!?では揃って」唱和
ください!?!?!」

「「不幸おだあああああああッー!」

今日もハードラックな一日が続くようです。まる。

C
M

「今回紹介するのはこれ!最新型清掃ロボ4649号だ!

「これが有れば日々のお掃除が楽しくなること受け合い!お子様

にも安心して使えるにゃー！

「WAO！凄いなつつちー！これが有れば毎日苦勞していた炊事洗濯もラクシヨーやね！

「そうだる青ピ、しかもこれは学園都市の最新技術を使っているから破壊力もゲンバツさ！

「Wonderful！わいも買わなくちゃ！でも・・・これだけ良い物ならお高いんでしょ？」

「いえいえ！けしてお高くは有りません！では神裂ねーちゃん！お値段お願いします！

『七閃！（七千円）

「有難うございます！しかも一年ローンも組めちゃうんだにゃー！

「まあ凄いわ、つつちー！一家に一台必需品やね！

「それだけじゃ無いよ？なんと今なら同じ物が三台付いてくるのさー！

「Great！最高にExcitingやね！一台だけでも要ら

ないのに三台なんて！

「更に更に！今なら送料手数料は全てジャパネット土御門が受持つんだぜい?!」

ジャーパネットジャーパネット、夢のジャパネットつちみかどー

「お電話待つてマース！」

「ふう…嫌な事件だったな…」

「はあ…はあ…なあ。」

「どうした？」

「また何で、ビリビリに追われてたんだよ?…あれか、『私と勝負しなさいっ!』って奴なのか?」

「いや、な。ビリビリが自動販売機を蹴るといふ器物損壊を見てしまった」

「はあ?なんでまた自動販売機を…?」

「万札飲まれたらしい」

「まじですか…」

なんとか、ビリビリ中学生から逃げ果せる事が出来た。

肩で息をする上条を見て、「ああ、俺ロボットで良かったな」と思った。主にスタミナの意味で。
と、此処でふと或ことを思いついた。

『あるえ、フランクリンバッチ使えば良かったんじゃない？』

正しく、後悔時既に遅し。orz

「う、あああああ！？不味い、特売が始まっちゃまう！んじゃこれで

「！

「あ、ああ。また会おう！」

HEROとCMとドラマ缶（後書き）

超電磁砲ルート、通ろうかなあ
でも原作見たこと無いっていう。

イノケンティウスに憑依してしまったー！的な奴書きたいな。
既に出てたら見てみたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1037z/>

とある科学の警備口ボ改

2012年1月4日06時49分発行